様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年１月７日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2009
課題番号：１８５２０２６６
研究課題名（和文）　明清寓言の多様性に関する総合的研究

研究課題名（英文）　A Synthetic Study on Various Fables in the Ming and Qing Dynasties

研究代表者
佐藤　一好（SATO KAZUYOSHI）
大阪教育大学・教育学部・教授
研究者番号：３０１９６２２４

研究成果の概要（和文）：本研究では、明清時代の多種多様な寓言に、分析的かつ総合的な考察を加えた。具体的には、動物の道徳的な行動を記す寓言集（義獣譚集）に注目し、呂坤の『無如』から董徳鏞の『可如』へ、呉震元の『忠孝別伝』から呉粛公の『闡義』へ、来集之の『樵書』から王言の『聖師録』へ、孫洙の『排悶録』から石川雅望の『通俗排悶録』への系譜を解明した。

研究成果の概要（英文）：In this study, I analyzed and synthesized various fables in the Ming and Qing dynasties. Specifically, I focused on several fable collections in which moral behavior of animals was recorded, and clarified the genealogies from Lü Kun's *Wuru* to Dong Deyong's *Keru*, from Wu Zhenyuan's *Zhongxiao biezhuan* to Wu Sugong's *Chanyi*, from Lai Jizhi's *Qiaoshu* to Wang Yan's *Shengshi lu*, and from Sun Zhu's *Paimen lu* to Ishikawa Masamochi's *Tsuzoku haimonroku*.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	1,000,000	0	1,000,000
２００７年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２００８年度	900,000	270,000	1,170,000
２００９年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総　計	3,400,000	720,000	4,120,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学　各国文学・文学論
キーワード：明清寓言・動物寓言・義獣譚集・『無如』・『可如』・『闡義』・『聖師録』・『排悶録』

１．研究開始当初の背景

明清寓言の多様性については、すでに陳蒲清『中国古代寓言史（増訂本）』（湖南教育出版社）、凝渓『中国寓言文学史』（雲南人民出版社）、呉秋林『中国寓言史』（福建教育出版社）が示唆に富む考察を行っている。とりわけ陳氏の考察は詳細であり、イソップ受容史の問題はもちろん、戯曲や白話長編小説にもその鋭鋒が及び、網羅的である。

しかし、清末の『中西聞見録』に見えるようなイスラム教関連寓言の受容史、『可如』を中心とする義獣譚集の系譜、『古今寓言』等の寓言選集の歴史などには、なお詳細な調査・研究を要する課題が山積している。そう

した認識の下、例えば徳田武『江戸漢学の世界』（ぺりかん社）が論じる石川雅望『通俗排悶録』等の、日本への展開も視野に入れ、明清寓言史に総合的な考察を加えようとして出発したのが本研究である。

２．研究の目的

文化の爛熟、出版界の盛況、西洋寓言の受容など、数多くの要因によって、明清寓言は著しく多様化した。その多種多様な明清寓言に個別的考察を加える一方、寓言集の系譜を総合的な見地から解明しようとした本研究は、言うまでもなく、従来よりも一層精密な明清寓言史の把握を目的としている。

３．研究の方法

当初は(1)～(4)の観点から、中国古典学の基本的手法（目録調査・実見・書誌学的調査・著者の略歴調査・各話の出典調査・訳注作成等）で研究を進めたが、最終的には義獣譚集の系譜解明に焦点を絞った。

(1)先行研究が等閑視している寓言集や個別作品の発掘、及びその基礎的考察。李蘇『見物』や劉元卿「寓言」（『劉聘君全集』巻 12）等。

(2)明清笑話の寓言性、及び諧謔寓言集の系譜解明に関わる調査・研究。『四書笑』や潘游龍『笑禅録』等。

(3)明清寓言の多様性の一翼を担う義獣譚集の系譜解明、及び義獣譚集的な性格を有する個別作品の発掘とその考察。『無如』から『可如』への系譜、徐芳「七義賛」や馮景「書十義事」等。

(4)明清時代に本格化する寓言選集の歴史解明に必要な調査、及び個々の寓言選集の基礎的考察。『古今寓言』や余懋学『説頤』等。

４．研究成果

研究内容は多岐にわたるが、義獣譚集の系譜解明に関する(1)～(4)、寓言集等の個別的考察に関する(5)～(8)を、主要な成果と考える。既発表論文を補訂しつつ、その概要を記す。なお、義獣譚に関しては、『中国の義獣たち』と題する小冊子を準備中である。

(1)『無如』から『可如』へ…明末清初の董徳鏞『可如』六巻（巻１～巻３の抄本が現存）の成立を明末のイソップ受容史と関わらせて論じる陳蒲清氏の所説を補正し、それが万暦 20 年序刊の呂坤『無如』四巻(巻２～巻４が義獣譚）の増補版的性格を有する義獣譚集であることを解明した。

現存『可如』巻１（羽属）「致養」（鸛の孝行譚）は、羅雅谷(イタリア人宣教師)の『哀矜行詮』巻２に基づく話であるが、イソップ受容の痕跡は乏しい。一方、現存『可如』には『無如』を出処とする話が群を抜いて多く、評語にも『無如』受容の痕跡が顕著である。

調査中に発見した『可如』逸文（『晴川蟹録』巻２「義蟹」）において、董徳鏞は利瑪竇（マテオ・リッチ）の『交友論』の一節を引用している。したがって、『可如』の後半部分に、『畸人十篇』によって本格化するイソップ受容の具体的痕跡が見出せる可能性は十分にある。しかし、仮にそうであっても、『無如』から『可如』への系譜を重視すべきであろう。

なお、『可如』の著者董徳鏞は、浙江寧波府鄞県の、全祖望が「西城の董氏」と称する名家の出であり、董琳・董鑰を遠祖、董光宏を祖父と仰ぐ人物である。父は董応震、母は周氏、抗清の義士として知られる董徳欽はその弟である。生卒年（1601～1662）の考証と併せて、董徳鑑「従兄孔昭別伝」その他による詳細な補説を予定している。

付言すれば、本研究期間中、中国から『呂坤全集』全三冊（中華書局）が刊行された。『無如』も収められており参考になるが、「無如目録」や巻３（禽類）の「鶻」が欠落している等の不備がある。今後も原本の併用が不可欠である。

(2)『忠孝別伝』から『闡義』へ…明末の呉震元『忠孝別伝』八巻（巻５～巻８の一部が義獣譚）から清初の呉粛公『闡義』二十二巻（巻 20～巻 22 が義獣譚）への系譜を解明した。両者の特異性については、すでに岸本美緒『明清交替と江南社会』（東京大学出版会）が注目しているが、両者の関係に関する明言はなく、中国における近年の『闡義』解題（『中国古代小説総目提要』人民文学出版社）を見ても、『忠孝別伝』との関係は等閑視されている。

しかし、『闡義』には事実として、『忠孝別伝』の影響が顕著である。例えば『闡義』巻 20（義獣）「果然」の総括に「呉長卿曰」として引くのは、『忠孝別伝』巻７（野獣）「果然惜其類」における呉震元（字は長卿）の評語に他ならない。また、『闡義』の出処には『忠孝別伝』を転用したと思われる箇所も少なからずあり、呉粛公が『闡義』を著す際、『忠孝別伝』を参照していたことは確実と言えよう。

なお、『闡義』は、乾隆 35 年序刊の孫洙『排悶録』に極めて重要な影響を与えている。孫洙が『排悶録』で人間の義行を記した後、義獣譚を収めているのは、『闡義』の構成を意識してのことであろう。『忠孝別伝』から『闡義』への系譜は、さらに『排悶録』へと展開するのである。

(3)『樵書』から『聖師録』へ…拙稿「王言『聖師録』に関する試論」（『中国学の十字路』研文出版）を発展させて、来集之『樵書』

十二巻（巻１「義虎」、巻３「馬殉主人」、巻６「貞鳥」等で義獣譚を収集）から王言『聖師録』（張潮編『虞初新志』巻 18 所収の義獣譚集）への系譜を解明した。『樵書』の書名は『虞初新志』巻 11 に基づく、『倘湖樵書初編』『二編』の略称である。

王言は、『今世説』の著者で『檀几叢書』の編者として知られる王晫の息子。鄧長風『明清戯曲家考略続編』（上海古籍出版社）が引く『友声新集』所収の書簡がその証左である。当初は、王言が諸書を博捜の上、『聖師録』を著したと推定したが、その後の調査で、彼が『樵書』から義獣譚を数多く転用している事実を発見した。来集之（崇禎 13 年の進士）は『檀几叢書』巻 46 所収『羽族通譜』の著者であり、『虞初新志』にも『樵書』から三話が収録されている。

王言による『樵書』の転用は多数ある。例えば『聖師録』「馬」の「天順中」と始まる話は、『樵書』巻３「馬殉主人」が『朝野記略』から引く話と一致する。加えて、彼は序文においても『樵書』巻 10「獣禽霊異」の冒頭部を援用している。『樵書』から『聖師録』への系譜に疑問の余地はないと思う。

なお、『四庫提要』巻 132 は『倘湖樵書』『博学彙書』を別著として個別に解題を加えているが、両者は、多少の異同はあるものの、基本的には同一書である。『西河集』巻 37 所収の毛奇齢「倘湖樵書序」から見て、『倘湖樵書』の改題本が『博学彙書』と推定される。

(4)『排悶録』から『通俗排悶録』へ…清の孫洙『排悶録』十二巻から江戸の石川雅望『通俗排悶録』（『排悶録』巻 12 を削り、巻７を上下に分ける）への系譜を解明した。既発表論文では『通俗排悶録』所収の義獣譚の半数を概観したに止まるが、先行研究に導かれながら、メッセージ性豊かな明清義獣譚の、日本への展開の跡を具体的に示すことができたと思う。

『通俗排悶録』所収の義獣譚は、巻２（忠義）「義象塚」「義牛」「義馬」「秦氏犬」「義犬」「毘陵猴」「義鶴」「黿」、巻３（貞烈）「許氏鶴」「鶏」、巻４（友愛）「童氏犬」、巻８（義俠）「義虎伝」「大鳥」、巻 11（霊異）「義虎」の全 14 話。もっとも、「童氏犬」だけは明清義獣譚とは言えず、宋代の話である可能性が高いが、孫洙は『闡義』巻 21（義獣）の出処「建寧志」を明清の地方志と考え、『排悶録』に収めたのであろう。

なお、宮内庁書陵部蔵『排悶録』写本（『異聞録』と題する改題本も現存する）には、雅望が和訳していない義獣譚も数多く収められている。例えば巻２（忠義）には、『聊斎志異』「義犬」を出処とする「蕪湖犬」「潞安犬」や『聖師録』「猿猴」を出処とする「白塔山猴」「金華猴」等が見える。孫洙が『闡義』の刺激を受け、義獣譚の収集にも意欲的であったことがわかる。

(5) 李蘇『見物』の思想的・文学的側面…明の李蘇『見物』五巻（『惜陰軒叢書』所収）には、『中国科学技術史（生物学巻）』（科学出版社）が総合的な「動物学」の著作と総括する側面と並び、明清寓言史の展開とも関わる思想的・文学的側面がある。

李蘇（嘉靖 34 年の挙人）は『無如』の著者呂坤と親交があり、「見物序」は呂坤の手で書かれている。その序を踏まえて言えば、李蘇の「見物」には、張華の「博物」とも邵雍の「観物」とも関わる総合的な性格が顕著である。「観物」は、「格物」にも連なる思想史の重要概念である。李蘇の関心が動物の倫理性に及び、動物を「師資」とする立場を表明しているのも、そのためであろう。

動物を「師」とする点で、『見物』は『聖師録』の「聖人は万物を師とす」に集約される義獣譚集との関係が生じる。『無如』の成立に『見物』の思想的影響があったとしても、不思議ではないのである。また、動物を「資」（反面教師）とする点で、『見物』には一般的な寓言文学との関係も生じる。例えば巻１（禽属）「蝙蝠」で、李蘇は『解慍編』巻９（偏駁）「蝙蝠推奸」の類話を引き、蝙蝠のような小人の言動を痛烈に批判している。

(6) 劉元卿「寓言」の独自性…明の劉元卿は、『賢弈(奕)編』（「観物」「警喩」「応諧」三篇が寓言史的に重要）の著者として知られるが、『劉聘君全集』所収「寓言」（全 30 話）には、他書の抜粋的な性格が濃厚な『賢弈編』とは異なり、彼の独自性が顕著と思われる話も存在する。

例えば「遣妄」がそれであり、貧しい男が桶の中で見つけた柿のへたを銭だと思い込み、その銭から空想を繰り広げ、興奮のあまり桶を壊してしまう話である。

笑話的な変貌を遂げているが、実は古代インドの寓話集『パンチャタントラ』「空想にふけるバラモン」の類話である。同時代の江盈科『雪濤小説』「妄心」との関係も想起される興味深い寓言と言えよう。しかし、従来注目された形跡はなく、中国における『パンチャタントラ』受容史の問題を扱う著作も、殷芸『小説』から江盈科「妄心」への系譜を述べるに止まっている。今後は『劉聘君全集』の「寓言」を視野に入れた考察が必要不可欠であろう。

(7)義獣譚集としての馮景「書十義事」…張潮編『虞初新志』では、『聖師録』とは別に、宋曹「義猴伝」、王猷定「義虎記」等の個別の義獣譚が光彩を放っている。以後の続編にも同様の傾向があり、黄承増編『広虞初

新志』巻 19 所収の、馮景「書十義事」もその一つである。

「書十義事」は、「義牛」「義馬」「義猴」「義虎」「義象」「義狐」「義蛇」「義騾」「義驢」「義猫」という全 10 話を合わせて一篇とした義獣譚集的な作品であり、明末清初の徐芳「七義賛」(『懸榻編』巻６）と同じく道義性が濃厚である。その淵源には、恐らく明初の周是修「三義伝」(『明文授読』巻 56 所収）の存在があろう。

「書十義事」には、周古漁の評語が指摘する『虞初新志』所収話（陳鼎「義牛伝」「烈狐伝」、宋曹「義猴伝」）と重複する話も見えるが、例えば「義蛇」のように独自の取材に基づくと思われる話もある。「義蛇」は、清初の三藩の乱を背景とする話で、呉三桂に呼応して反乱を企てた三兄弟の賊軍と激闘を繰り広げ、その進軍を阻んで死んだ大蛇の義行を表彰している。文中に「康熙甲寅(13 年)」とあり、馮景と同時代の話である。

(8)注目に値する寓言集等…その他、本研究で基礎的考察を加えた注目すべき寓言集等について略述する。

①陳相『百感録』一巻…『四庫提要』巻 124 によると、『荘子』や『戦国策』風の動物寓言集。しかし、『芸心識餘』巻６「瞎撞」等が出処を『百感録』として引く話だけでは、その全貌を知ることは困難。加えて、『千頃堂書目』巻 12・巻 15 は著者を「丁相」とする。現時点では存否未詳の、幻の寓言集と言えよう。

②陳其力『芸心識餘』七巻続一巻…嘉靖 38 年序を有する。「禽鳥」「獣畜」「龍蛇」「虫鼠」「魚鼈」の五部門に分け、動物譚を数多く収集。『寓言辞典』(明天出版社）等に解題はあるが、詳細な考察はないようである。原則として出処が記されており、義獣譚の出典調査には極めて有用。「芸心子曰」と始まる評語の分析が今後の課題である。

③沈弘正『虫天志』十巻…書名は『荘子』庚桑楚篇の「唯だ虫のみ能く天なり」に基づく。「鬬」「舞」「能言」「伝書」「識字」「奏技」の六部門に分け、歴代詩文を収集する異色の動物譚集。純然たる寓言集ではないが、『与物伝』を引用するなど、義獣譚集的な側面が備わる。なお、沈弘正には別著『小字録補』『枕中草』、伝記資料として董其昌「沈高士公路墓誌銘」(『容台文集』巻 8）等がある。

④顧聖之『蟯談』二巻…『稗乗』所収の寓言小説。巻頭の「蟯談引」が『荘子』に匹敵する作品と高い評価を下す。例えば巻上では、擬人化された主人公の蟻（蚍蜉）が自分よりも大きな蟷螂・象・鼇を相手に、口頭での力比べを展開し、彼らを次々と言い負かす。論戦の過程で「蟷螂の斧」をはじめとする数々の典故が用いられており、内容的にも形式的にも極めて興味深い作品と言える。

⑤陳僖『識物』一巻…清初の小品文。『昭代叢書』所収。『中国叢書綜録』は『見物』同様、子部農家類（生物之属・総志）に分類しているが、尤侗「識物序」は『荘子』の寓言や「斉物」思想との関係を模索。題目はなく、孔雀・蛾・蚌・果然・蝙蝠・貘・蝸牛・微塵子・号寒虫・叩頭虫に関する全 10 話。個々の動物の名称や生態に考証を加えつつ、教訓を引き出そうとしている点で、動物寓言集的な色彩を帯びる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
①佐藤一好「義獣譚集としての馮景「書十義事」」(『日本アジア言語文化研究』第１３号、掲載決定、査読無)
②佐藤一好「『通俗排悶録』所収の義獣譚（上)」(『学大国文』第５２号、２００９年、３５～６０頁、査読無)
③佐藤一好「『可如』小論（補説）―董徳鏞の生涯を中心に―」(『学大国文』第５１号、２００８年、７７～９４頁、査読無)
④佐藤一好「董徳鏞『可如』小論―呂坤『無如』との関係に注目して―」(『大阪教育大学紀要（第Ⅰ部門　人文科学)』第５６巻第１号、２００７年、６３～７７頁、査読無)

〔学会発表〕（計３件）
①佐藤一好「中国文学と『パンチャタントラ』―「空想にふけるバラモン」説話の諸相」(第１５回大阪教育大学日本・アジア言語文化学会、２０１０年１１月２３日、大阪教育大学)
②佐藤一好「李蘇『見物』研究の視座」(第１３回大阪教育大学日本・アジア言語文化学会、２００８年１１月２３日、大阪教育大学)
③佐藤一好「明末清初の動物寓言集の系譜について―『無如』から『可如』へ―」(文芸学研究会第３０回研究発表会、２００７年３月１７日、同志社大学)

〔その他〕
①佐藤一好「中国の動物譚―「雁」説話の諸相を中心に―」(平成２０年度教育研究講演会、２００８年８月２１日、堺市教育文化センター)

６．研究組織
(1)研究代表者
佐藤　一好（SATO KAZUYOSHI）
大阪教育大学・教育学部・教授
研究者番号：３０１９６２２４